

YOUTUBE の普及、Tiktok の登場。映像と言うメディアは、幼児からすでに私たちの手の届くところにもたらされ、市民の誰もがいつでも表現の自由を行使できる素晴らしい時代となりました。そんな中、テレビドラマと言う表現形式はどうでしょうか？

映画と並んで、意外に人間臭い作り方をする映像メディアという意味では、IT メディアの登場以後もその表現法や作り方はあまり変わっていないと思います。むしろそれゆえに人間関係の濃い現場が、友情や教師生徒の愛情をはぐくんでいる。作品を見て、そんな確信を私は得ましたが、みなさん、いかがでしょうか。

さて、作品の一つ一つについては、今回も進歩する映像機器の威力を発揮している学校もあれば、そうしたテクニックに走らず、演技にこだわったり、こだわらなかつたり、という様々な映像表現を見させていただきました。しかし、いろいろ映像、手法にこだわりはある中で、私は、次の2点に重きを置かせていただきました。

それはまず、「エンターテインメントとして、こうしたら面白いだろう。そういうねらいを持って、仕掛けて、それが成功しているか？」もう一つは、「心を打つ、そんなシーンを作れているか？」この2点です。

例えば、コメディとして、不条理な学園ものを描きたいと企画し、それを達成したものはいくつかありました。これはたくさん笑わせていただきました。また、箱と糸電話という小道具を使って、現実と仮想空間をうまく作った作品もありました。作者のねらいが、うまく実を結んでいる作品だと思います。

また、語りあるいは、シーンでのセリフで、登場人物の気持ちがしんみりと、あるいは強く伝わってくる作品もありました。これは作品自体のメッセージが伝わってくる瞬間でもあり、ハートで受け止めさせてもらいました。

映像の細かいところに非常にこだわって努力している作品もありました。特に多人数のエキストラの動き、たたずまいをしっかりと演じさせ、絵を作っている、そんな学校もありました。

それら一つ一つは、見る人の感動に集約されていきます。

最後のエキストラの話はつけたしですが、まずは、ストーリーの本題の流れで、上記二つを実現しているか？そして演じて撮ってみてその完成度、リアリティーで視聴者に感動を与えているか？これが、まずは、大きな基準となります。まずはこの基準を越えよう。そのためには自分が納得するものを作る。まずはそれが初めの一步だと思います。みなさん、テレビドラマの世界は奥が深いです。一緒に感動を作りましょう。